

年 組 氏名

平氏略系図

忠盛ただもり

忠盛ただもり 清盛きよもり

② 忠度ただのり 頼盛よりもり 教盛のりもり 経盛つねもり

教の経の ① 敦盛あつもり 重衡しげひら 知盛ちもり 宗盛むねもり 重盛しげもり

知章ちあき 清宗きよむね ③ 維盛これもり

源氏略系図

義朝^{よしもと}

義賢^{よしかた}

為朝^{なめと}

義朝^{よしもと}

義仲^{よしなか} ⑤

義経^{よしつね} ④

範頼^{のりより}

頼朝^{よりと}

風雅な一面をもつ敦盛、忠度

をはじめ東国の武者たちの涙を誘った。

都落ちから半年後、忠度は一の谷の合戦で討たれるが、そのえびら（矢を入れて背負う武具）には、歌を一首書きつけたものが結びつけられていた。

世の中が平和になり、『千載集』が編まれた時には、忠度が形見として俊成に手渡した歌集の中から、一首が、「読み人知らず」の歌としてのせられた。

家族への思いを断ち切れなかつた維盛

③維盛 維盛は、「光源氏」と呼ばれるほどの美貌の持ち主であり、また富士川や俱利伽羅峠の戦いでは大將軍として戦ってきた。

都落ちの際には、一門の者がみな妻や子供を連れてゆく中で、維盛だけは、いっしょに行きたいと泣き慕う家族と別れ、一人で都を落ちてゆく。しかし、

都に残してきた家族への思いは、いつになっても断ち切ることができない。一の谷の合戦に敗れ、からも逃げ帰ってきた屋島やしまでは、「生きていてもしかたがない」と言つて、こつそりと館を抜け出し、高野山へと向かう。途中、何度も都へもどり妻や子に会いたいという気持ちにかられながらも、高野山の溝口入道のもとで出家する。そして、入道とともに熊野もうでをした後、最後まで妻や子を思いながら那智の沖で入水する。

悲劇と伝説のヒーロー、義経よしつね

④義経 幼名牛若丸。弁慶との五条大橋での出会い有名。七歳の時、鞍馬寺に入り、以後、平泉に赴いて、奥州藤原氏の庇護を受けたといわれる。兄頼朝を助け、義仲追討、一の谷の戦い、屋島の戦いで次々に勝利をあげ、平家の滅亡に最も大きな功勞をあげた。しかし、次第に、兄頼朝と対立を深め、ついには頼朝から追われる身となった。奥州平泉に追い詰められた義経は、残った弁慶ら忠臣とともに、一生を終える。その一生があまりに悲劇的であつたためか、義経には多くの伝説が残されている。また、各地に、義経にちなんだ地名も多い。

木曾の英雄、
義仲よしなか

⑤木曾義仲 頼朝に遅れること一か月、木曾で挙兵した義仲は、横田河原、俱利伽羅峠で次々と敵を退け、都入りする。法皇からは「朝日將軍」の称号を贈られるが、都では、その言動の田舎者いなか者ぶりが、事あるごとに笑われる。

都を治めることもできず、法皇の支持も失い、水島の合戦で平家に敗れ、さらには頼朝との関係もよくいかなくなるなど、最後には全くの孤立無援の状態でとなり、とうとう頼朝の命令をうけた義経、範頼の軍に追われる身となる。

都から琵琶湖畔の瀬田まで追いつめられた義仲は、最後には、乳兄弟の今井兼平とたった二騎だけとなり、互いに相手の身を案じつつ討死する。

平家一門の最後——壇だんの浦うらの戦いでの武將たち

教盛のりもり、経盛ねもりは、よろいの上にいかりを背負い、兄弟で手に手をとって海に沈み、資盛すけもり、有盛ありもり、行盛ゆきもりの三人も互いに手を組んで沈んでいった。しかし、都落ち以来、平家の総指揮官であった宗盛むねもりと、その子清宗きよむねは、船の上でうろうろするだけであった。余りの情けなさに、平家の侍が二人を海に突き落とすが、泳ぎまわっているうちに源氏方に捕らえられてしまふ。

平家方の勇将として武勇を誇つた教経のりつねは、敵の大將義経に組もうとするが果たせず、最後は、人並みはずれた力もちの敵三人を道連れにして、海に飛び込む。こうして平家一門の人々の最期を見届けた平家方の知将知盛とももりは、「見るべき程の事は見つ、今は自害せん（見届けるべきことはすべて見届けた。今はもう死ぬしかない）」と言って、よろいを二つ身につけ、海に沈んでいった。